

全国発信の『種目』はITからキャビアまで 多彩な取り組みで地域を活性化する積極市政

多士済々の新見ブランドを全国展開

地域間競争が激化する一方の今日、地域ブランドの創設と発信は全国自治体に共通する課題であり悲願ともいえる。しかし、新見市はその素材に恵まれた地域も珍しいだろう。ざっと数え上げれば、園芸品種だけでもピオーネをはじめとする各種ブドウ、トマト(桃太郎エイト・桃太郎サニー)、リンドウなどがある。また全国に数あるブランド牛の中でも、和牛のルーツとの尊称を冠された新見市の千屋牛は格別とされている。

さらにユニークなところでは、新見市漁協が養殖飼育に成功したチョウザメおよびその卵・キャビアが、東京の有名百貨店で「新見産フレッシュキャビア」と銘打たれてこの春から高級食材のコーナーにお目見えしている。

「実は新見市ではトリュフも取れるんです。従ってキャビアと合わせて、フォアグラが加

有数のトマト産地となっている。平成20年度には総額2億円を投入した選果施設を整備。より高品質なトマトの安定出荷体制が整った。リンドウ

新見市の冷涼な気候を生かして平成12年度から栽培を開始。栽培から10年でその品質・生産量は早くも県下一ととなっている。新見市のリンドウ栽培の歴史は新しいが、多額の設備投資も必要なく、高齢者や女性に取り組みやすい状況で、新見農業普及指導センターを中心に短期間でこのような体制が構築されている。これにより、平成21年度には岡山県農林漁業近代化表彰が授与されている。

千屋牛

千屋牛とは新見市千屋地区を中心に肥育された肉牛を指す。従来は各地域で独自の地域牛を名乗っていたが、平成17年の市町村合併(旧新見市、大佐町、神郷町、哲多町、哲西



千屋牛がテーマの「千屋牛うまいものフェア」



新見市の基幹農作物 ピオーネ

われれば世界3大珍味がそろったことになる。これはやらなければいけないかな(笑)と、ひそかに思っているのですが、今はその余裕がありません」

冗談半分のような口調でそう語る石垣正夫市長だが、追々述べていくように、旧新見市時代にさかのぼる平成6年の市長就任以来の足跡をたどってみると、これはかなり本気混じりの発言ではないか——とも推測される。

ここで新見ブランドの主要品目について、簡単なプロフィールを改めてご紹介していきたい。

ピオーネ

マスカットをはじめとする岡山県のブドウは昔から有名だが、新見市の本格的なピオーネづくりは昭和61年から比較的新しい。だが平成22年末現在の段階で既に約82haの生産団地を形成。県下有数の産地になったと同時に、新見市の園芸品目では第1位の出荷額(平成22年度9億2000万円)を誇る。主に東

町の1市4町)を機に、千屋牛を統一名とする地域ブランドとし、地域団体商標を受け、全国に向けて情報を発信している。千屋牛は前述したように、和牛登録会も認める全国和牛のルーツと位置付けられ、「和牛の中の和牛」とも称されている。石垣市長によれば「遠方の都市を訪ねたときなど、岡山県新見市といっても分かってもらえないことが多いが、千屋牛の産地だということとみな分かってくれる」というほどに、千屋牛のブランド・バリューは全国的に根強い。千屋牛は現在、増頭計画を実施中で、平成17年度の地域ブランド確立時に年間3000頭弱だった生産量を、平成23年度中に4000頭強に引き上げる予定である。

チョウザメ

平成12年度から新見漁協で養殖に着手、その成り行きが全国的な注目を集め、平成18年度からは県内外に生きたままのチョウザメ(淡白で独自の風味を持つ白身として定評がある)を出荷するまでになった。その卵の塩漬けは



県下一の生産量を誇るリンドウ



いしがきまさお
石垣正夫
新見市長

京大田市場を中心に出荷され、東京の百貨店でも新見のピオーネは最高級品とされている。また平成20年度には日本農業大賞を受賞するなど、今や新見市管内の基幹農作物といえる。

トマト

夏に涼しい新見市の気候を生かすべく、昭和30年代から栽培を開始。幾度かの品種改良を行いつつ生産の拡大を図り、現在は桃太郎エイト、桃太郎サニーを主要品種として県下

世界3大珍味のキャビアとしての有名だが、世界基準の塩分濃度3.5%フレッシュキャビアとともに、新見市の地元醤油醸造会社の醤油をからめたフレッシュキャビア・醤油風味が今年春から、東京・新宿の伊勢丹で販売が開始された。

このように主要品目だけを挙げて、新見ブランドの各産品がいかに全国レベルの実力を備えているかが分かる。

「私は自身の持論として、何事においてもどうせやるなら誰にもマネのできないもの、よそではやれないものを試みる姿勢が大事なのだと思っておりますし、それを常に地域産業の振興に携わる職員にも伝え、地域の産業の担い手の方々にもハッパを掛けているのです」



桃太郎トマトは新見ブランド野菜の代表格

新見ブランドの各産品の存在感は、まさにその境地に達しているものが多い。

常に全国に先鞭をつけてきた 地域情報化施策

誰にもマネのできないもの、よそではやれないもの——という観点から、石垣市長が就任して以来の新見市の行政施策を語るとすれば、やはりIT技術を媒介にした一連の地域情報化施策が立ちどころに浮かんできく。

新見市の地域情報化施策が全国にその名をとどろかせた最初の事例は、平成14年6月23日に実施された全国初の電子投票だ。その対象は新見市市長選挙および市議会議員選挙だった。石垣市長は自ら準備した全国初の電子投票によって当選した全国初の市長という栄誉をも担うことになったのだ。



多様な使い方ができる告知放送機器（防災情報端末）を各家庭に配備



光ファイバーの入線でIT化の推進、管理業務の省力化が図られた下水道施設

- 企業情報化支援施設「i-boxにいみ」の設置（平成13年度）
- 携帯電話不感地帯の解消（平成18～19年度）
- 同じく次のソフト事業を実施してきた。
 - 電子投票
 - 遠隔O・h！買いもの事業（実証実験）
 - 住民基本台帳カードの独自利用（住民票自動交付、集団検診結果を自宅PCで照合、公共施設の予約など、平成15年度）
 - 千屋牛パワーアッププロジェクト事業（千屋牛の発情から出産、放牧などの監視システム、平成16年度）
 - 新見あんしんネット事業（遠隔医療、平成20年度）
 - 地域児童見守りシステムモデル事業（平成19年度）
 - 防災管理システム構築事業（インターネット、携帯電話、CATV、告知端末放送による災害時の情報収集と伝達。平成19年度）
 - 緊急通報事業（高齢者などの病気・事故などの緊急事態発生時に告知放送機器や携帯電話メールを通じて通報）
 - 地域サポート事業（実証実験 地域の市民活動の情報発信、平成20年度）
 - 救急車画像伝送事業（救急車に設置したカメラを通じて車内の搬送状況を医療機関等に画像伝送）
 - ICT利活用教育推進事業（タブレット端末と電子黒板を活用した授業、平成22年度）

た地域情報化政策は、石垣市長が初めて市長に就任した翌年の平成7年から既に始まっていた。「平成7年にまず市内の中学校の生徒1人に1台ずつのパソコンを導入し、翌8年には市内の小中学校の児童2人に1台ずつのパソコンを導入」（石垣市長）しているのだ。

国がIT基本法を施行したのは平成13年。そしてIT基本法を実施する戦略的目標として同時に発表された「e-Japan戦略」では、日本が2005年までに世界最先端のIT国家となっていることが目標として掲げられ、そのためには2005年までに全国民がインターネットを使いこなせるようになっていなければならないとした。「e-Japan戦略」はご承知のように予定通りには進まなかったわけだが、IT基本法が施行される5年も6年も前に、新見市ではほとんどすべての小中学生がパソコンを操り、インターネットに親しんでいた事実は、やはり目を見張るしかない。

さらにアメリカをはじめとする世界数カ国でしか実施されていなかった電子投票が、IT基本法施行の翌年に早くも新見市で実施されたという事実はまさに「歴史的な出来事」として、改めて顕彰されるべきではないだろうか。

「私自身の気持ちとしては、よそでやっていないのならうちがやってやろう。いずれ電子投票の時代がくるのなら、その先駆けとなってやってみよう——という信念で電子投票の実施を打ち上げたわけです。でも本当に

「地域情報化に終わりはありません。しかし、地域情報化計画に基づく各種の施策や事業を積み重ね、さらにラストワンマイル事業が平成20年度でほぼ完了したことによって、新見市の全域がブロードバンド化されると同時に、告知放送機器（防災情報端末）も各家庭に設置されました。テレビの難視聴地区解消や地上デジタル放送への対応も含めて、これで新見市の地域情報化は次のステップへの準備が整ったかなというのが、私の今の実感です」（石垣市長）

ちなみに、ラストワンマイル事業の完結と併せて、山に囲まれた地域でありながら携帯電話の不感地帯がほとんどないという非常に快適な通信環境が実現した背景には、ソフトバンク社の全面協力による大幅な基地局増設（14基から161基へ）という事実がある。地域情報化に向けた石垣市長の熱意に、同社・孫正義社長が賛同した結果だという。

ソフトボールのまちづくり、健康増進のまちづくり

新見市は平成13年度に全国中学校ソフトボール大会の会場となって以降、何度も全国大会を開催している。全国大会のほかにも日本リーグの会場にもなっている。これらの大会が開催できたのは、もともとソフトボール

大変だったのは、職員の皆さんです（笑）。最初は市内にも反対意見が多かったのですが、私がぜひやりたいと押し通したものですから、職員の皆さんも腹をくくってくれて、とにかく一生懸命に努力してくれた。そして成功に導いてくれた。その経験値が、やはり何よりも貴重なのだと思います」（石垣市長）

新見市の地域情報化施策は、このようなベースとなる初期の経験値を土台に、さらに進化しながら、現在に至っている。そのあらましは次の通りだ。

平成17年度に新見市地域情報化計画を再策定（平成12年度策定の計画を見直したもの）。

- 短期・中期・長期の推進目標を掲げ、「光で広がる快適環境都市にいみ」を基本コンセプトに、民・産・学・官の連携による安全・快適・情報文化都市の創造を目指す内容となった。
- 同地域情報化計画に基づき、次のハード事業をこれまでに実施してきた。
 - 新見市地域情報通信ネットワークの構築（平成12～13年度）
 - 下水道FTTH事業（下水道管を通して各家庭へ光ファイバーを接続する事業。水道のメーター検針や家庭内情報端末での行政情報提供も実施。平成14年度）
 - ラストワンマイル事業（平成17年度工事開始。20年度からインターネット、IP電話による通信サービス供用開始、同じくケーブルテレビ供用開始）



市民力を一段と高めた「ソフトボールを通じたまちづくり」（写真はソフトボールフェスティバル）

が盛んに行われているという土壌と、熱心なソフトボール愛好者を中心とした活動によるものである。近年では「ソフトボールを通じたまちづくり」を標ぼうしており、世界選手権のアジア地区予選でもある第9回アジア男子ソフトボール選手権大会（平成24年秋に開催予定）の誘致や、都道府県対抗全日本中学生男子ソフトボール大会の10年連続開催（平成23年度～32年度）が決定するなど、まさにソフトボール競技の中心地としての様相を呈している。

「新見市のソフトボールは小学生から盛んに行われている。青年会議所が主催する大会は40年以上の歴史があり、地域に根付いた大会です。以前よりも市民全体の競技レベルを向上させるため、優秀な指導者を外部から招聘したりしました」（石垣市長）

その成果は市内の中学校が全国制覇し、高



復活した法曾焼きも展示されている「猪風来美術館」

新見市の各所を回りながら取材者の胸の内に蓄積していった最大の印象もまた、客観的には山間の小都市と違っていい新見市の静かな町並みの随所に感じられる、地下からちよろちよろ湧き出してくるかのような活力だった。そして新見市の最奥部ともいふべき法曾地区の猪風来美術館に至ったとき、その思いはより強まった。廃校を利用した同美術館には新見市が招いた館長でもある異色の陶芸家・猪風来氏の



船川八幡宮秋季大祭で振る舞われるどぶろくの仕込み風景

校も男子が国体で優勝するなど着々と上がり、ついには全日本レベルの選手を輩出するまでになった。
しかし、ソフトボールを通じたまちづくりの主眼は、こうした競技力の向上にばかり向けられているわけではない。各種大会が開催されるたびに市民がボランティアスタッフとして運営に参加したり、選手たちを手厚く迎えたりする経験を積み重ねることにより、自然なホスピタリティが醸成されてきた。全国大会では、大会に出場するチームを市民が応援するなど、大会の盛り上げはもとより選手と市民の交流が行われている。
単にソフトボールを盛んにすることを目的とした「ソフトボールのまちづくり」ではない。ソフトボールという競技を媒介に、市民

まちの底流に漂う 縄文から未来までの「IT」

ITからキャビアに至るまで、地域活性化に向けた新見市の多彩な取り組みの事例の数々をざっとご紹介してきたわけだが、石垣市政のこのような積極的な姿勢を支えているのは、果敢な行財政改革の成果である。平成17年度の合併時には情報化政策などの積極的な推進による効果とは別に、新見市も全国の自治体と同様、総務省の定めた健全化判断比率を見ると正直なところ、はかばかしくなかったという。マスコミによってはかなり危険水域という見方も呈示されたようだが、合併を機に新見市は、改めて行財政改革

が心を一つに寄り合わせ、わがまちへの愛を改めて確認することなどを重視するという意味で「ソフトボールを通じたまちづくり」なのだ。新見市にとってのソフトボールは、新たなまちづくりのツールとしても、見事に花を咲かせようとしているともいえる。
健康志向といえば、今回、平成17年にオープンした市民の健康増進施設「げんき広場にいみ」を訪問することができたので少しご紹介したい。
「げんき広場にいみ」は温水プールを核とした会員制健康増進施設だ。スポーツクラブの運営に実績のある民間業者を指定管理者に、専門家の指導による会員個々別の運動指導および各種教室を開催している。さらに平成22年3月に指定運動療法施設の認定を取得したのを契機に、医師が発行する「運動処方箋」に基づく本格的な運動療法を実施している。訪問したのは平日の午後ということもあり、利用者の数は週末ほどには多くなかったが、何となく利用しているという雰囲気の人がほとんどおらず、インストラクターの指導を仰ぎながら熱心に運動に取り組む人の姿が目立つのが印象に残った。
「実はこの施設をつくる時、各方面からかなりの批判がありました。豪華な運動施設をつくったところで、会員制ということもあり、そんなに利用者はいないのではないかということなどが、批判の主な内容でした。しかし、どうせ健康増進施設をつくるなら本格的なも

への本格的な取り組みを開始。合併で膨れ上がった職員数の大幅な削減(合併後の5年間で20%以上に当たる約150名削減)を実施する半面、予算配分の選択と集中への配慮を細心に行った。その結果、活力を失わずに経費の節減を実現することができた。
「行財政改革は徹底して行わなければ意味がありませんが、そのことで市政が全般に委縮してしまいうようでは、さらに意味がなくなってしまう。だからこそ新見市では岡山県からの権限移譲(16路線の県道、特定行政庁、福祉各法など)も積極的に推進していきますし、地域ブランドの推進、地域産業の活性化など、必要なところにはどしどしお金も投入していきます。都市というのは生き物ですから、栄養を与えなければ活力も生まれないのです」(石垣市長)
新見市の各所を回りながら取材者の胸の内に蓄積していった最大の印象もまた、客観的には山間の小都市と違っていい新見市の静かな町並みの随所に感じられる、地下からちよろちよろ湧き出してくるかのような活力だった。そして新見市の最奥部ともいふべき法曾地区の猪風来美術館に至ったとき、その思いはより強まった。廃校を利用した同美術館には新見市が招いた館長でもある異色の陶芸家・猪風来氏の

(取材・文 遠藤 隆)



吉備高原の秘境・哲西地区に伝わる哲西鯉が窪湿原まつり(5月3日開催)

「げんき広場にいみ」は温水プールを核とした会員制健康増進施設だ。スポーツクラブの運営に実績のある民間業者を指定管理者に、専門家の指導による会員個々別の運動指導および各種教室を開催している。さらに平成22年3月に指定運動療法施設の認定を取得したのを契機に、医師が発行する「運動処方箋」に基づく本格的な運動療法を実施している。訪問したのは平日の午後ということもあり、利用者の数は週末ほどには多くなかったが、何となく利用しているという雰囲気の人がほとんどおらず、インストラクターの指導を仰ぎながら熱心に運動に取り組む人の姿が目立つのが印象に残った。
「実はこの施設をつくる時、各方面からかなりの批判がありました。豪華な運動施設をつくったところで、会員制ということもあり、そんなに利用者はいないのではないかということなどが、批判の主な内容でした。しかし、どうせ健康増進施設をつくるなら本格的なも

作品を主体に、生命の根源、森羅万象、喜怒哀楽などのテーマ別展示室が用意されている。猪風来氏は縄文時代の焼き物を現代よみがえらせる活動のかたわら、生命の根源を感じさせる多様な作風を持つ作家だが、同美術館に着任後、法曾地区でかつて栄えていた法曾焼きも地域の人々とともに百数十年ぶりに復活させた。もちろん含めて、同美術館には誕生・復活・再生のエネルギーがさまざまな形で宿っているともいえる。その世界に触れたときの「感覚」が、新見市のまち中で感じ続けていた静かな「活力」とどこか相通じるように思われたのだ。
先ほど新見市の多様性の一例として「ITからキャビアまで」という表現をしたが、むしろ「縄文から未来まで」と言い換えた方がいいようにも思えてきた。



医療費削減に効果を見せる健康増進施設「げんき広場にいみ」